

コメント3

小形 道正 京都服飾文化研究財団

はじめにみなさまに謝らなければならないのですが、先日コロナワクチンの2回目接種を受けたのですが、その副反応による高熱でしっかりとしたコメントができないかもしれません。なにぶんご容赦いただければ幸いです。いずれの先生方のご報告も大変興味深く拝聴しました。それぞれのご報告についていくつかコメントと質問をいたします。

■ メリヤスに着目する理由とは —— 杉浦報告をめぐって

杉浦未樹先生の報告については、色々と考えていることも多いのですが、あまりまとまっていないので、まずは単純に、メリヤスを研究対象として着目された理由について、というよりなぜメリヤスが多くのアフリカの人びとに受け入れられたのかということをお聞かせいただければと思います。また、メリヤスのシャツがスワヒリや洋装とのあいだをめぐって立ち現れてくる規範や、現地でのメリヤスのシャツと他のシャツとの違いなどについて、教えていただけるとうれしいです。

■ モンペが実際にどのように階級をなくすのか —— 森報告をめぐって

森理恵先生の報告については、まずはモンペが日本だけではなく、韓国や台湾、ジャワにも広がりを見せていた姿は率直に驚きました。そして、これは質問に関わってくるのですが、モンペが農村の現実や実用性からではなく、むしろ都市のなかで「日本の美」などといった何かが見出され、発見され、創造されたものだというひとつの仮設は大変興味深かったです。そこで、こうした動員のための、あるいは階級を超える可能性としてのモンペが、上からの視点であるいは下からの視点で作られ、普及したのか、当時どのような立場の人がどのような観点から述べていたのか、そのあたりをもう少し詳しく教えていただけるとうれしいです。

また、特にこの部分で興味深いと思ったのは、武庫川女子大学の井上雅人先生も国民服の研究を上梓さ

れていますが、井上先生の場合ですと総動員体制化のなかでの身体の平等化と、戦後占領期における民主化によって自家裁縫による洋裁文化が花めくという議論を展開されていたと記憶しており、身体という点を強調されていたと思います。そのように考えてみますと、身体の平等化と階級を超える美あるいは何かという視点はそれぞれ似ているようで異なる点があるのかなと思います。そのあたりからもモンペがどのように階級をなくしていくのかということについて教えていただけるとうれしいです。

■ 川久保をめぐる二つの神話と「脱神話化」の帰結 —— 安城報告をめぐって

まずご指摘にあったFuture Beauty展は私が財団に勤める以前の展覧会なので、携わっておらずよくわからないというのが正直なところです。安城寿子先生の報告については、何らかの神話に寄りかかっているのではなく、歴史を正確に検証して議論しなければならないというご指摘は至極当然だと思います。今回の発表に即しますと神話(化)が二つあり、コムデギャルソンに異国趣味的なものあるいは日本的なものを求める神話があり、一方で、一種のアヴァンギャルドさを求めていく神話みたいなものが存在しているのかなと感じました。そして、双方の神話がそれぞれ呼び戻されたり、召喚されたりというふるまいがある。Future Beauty展では異国趣味的の神話が語られているという話だったと思いますが、別の時にはアヴァンギャルドも呼び戻されることもあるのではないかと思います。ひとつめの質問としてはもし片方だけの神話が呼び戻されているのだとしたら、とくにいつごろから語られているのかということですね。つまり、両者の神話はその時期によって濃淡があるのかなのか、あるとしたらどのような理由によるものなのかということですね。

また、ふたつめの質問としては、こうした神話を脱神話化していくお話、あるいは単純な議論をよりきちんと精緻に、あるいはより複雑にしていっていきおっしゃるとおり必要だと思います。そして、神話

が神話として作られていく過程でデザイナー自身による発言なのか、批評家による言説なのか、ファッション誌の記事ないし撮影担当者にどこまで決定権があったのか、あるいは論者の解釈によるもののかなど色々と考えてみなければならないと改めて思ったのですが、そもそもそうした脱神話化していく、あるいはより正確にしていく議論において、その先にいったい何が待っているのか、どのような可能性が広がっているのかということが気になりました。